
私とボクの瀉血デイズ。

立花 凜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私とボクの瀉血デイズ。

【Nコード】

N4150P

【作者名】

立花 凜

【あらすじ】

生まれた三ヶ月後に父親が死んで母親は尻軽淫売女になって去年姉のユリが自殺しちゃってリストカットとか瀉血とかが趣味になっちゃった女子高生のキリがドッペルゲンガーに会うお話。

ブローグと「1：夕立のように。」と「2：奥様は売春婦、姉様は自殺済。」

初めて自傷と言われる行為に触れたのは、確か小学六年生の頃だった。気がする。確証は無いけれど。

理由、理由。確か「漠然とした憧れ」とかだったっけ？ 何かリズカとかっこいいし的な。何がかっこいいと思ったのかはもう覚えていないけれど。要するに私はバカだったわけだ。罵ってくれ、感じるぜ。

カッターナイフで切り裂くのは怖かったから、待ち針で引っ掻いて傷をつけた。手首を傷つけるのは怖かったから、手の甲を傷つけた。痛くは無かった、もともと痛覚は鈍かったから。一度引っ掻いただけじゃ傷って言えるようなレベルの傷にはならなかったから、同じ場所を何回もカリカリと引っ掻いた。蚯蚓腫れになった。初めはそれだけで終わった。

何回目かの自傷行為の時、加減を間違えて血を出してしまった。チクリとした痛みを感じて慌てて確認する私、そして溢れて球を作る血液。私は惚れた。ラヴ。血液に魅せられたのだ。ラヴ&ピースならぬラヴ&ブラッド。それから私は憑かれたように自傷行為に励んだ。おそらく自慰行為の倍は軽く。すぐに凶器は待ち針からカッターナイフへと変わった。もともと鈍い痛覚はさらに鈍くなっている。切ったって痛くないからさらに切る。ループしていると何だかエコな気がして嬉しくなる。そして切る。その繰り返し。

さらには瀉血と言う行為にもハマってしまった。ネットで買った駆血帯（あの採血とかの時に巻かれるチューブ）で縛った腕にネットで買った注射針を突っ込んで台所にあるボウルに血を溜めて。血が抜けた後のフラフラ感が堪らない。セックスなんかよりよっぽど気持ちいいんじゃないだろうか。やったこと無いから分かんないけどさ。

とにかく、そうして私はいつ嫁に出されても恥ずかしくない立派

なメンヘラ女となつたのでした。めでたしめでたし。

1：夕立のように。

夕立のように血が降り注いだ、床にびちゃびちゃと。私は身体中の空気を全て追い出す勢いで溜め息を吐く。

「死んじまえ、私。」

例えば早朝腕に刺した注射針をぐりぐりしていたら急に勢いよく血が飛び出て、それに驚いてボウルを落としてしまった所為で台所の床が血だらけになってしまった時、あなたならどうするだろうか。瀉血とかしないから知るかそんなもん、だって？ 想像力を働かせるバカ野郎、お前には困っている私を助ける程度の甲斐性も無いのか。

なんて、ぶちぶち独り言を言っても仕方無い。とりあえず今はこの床を満たす赤い水をどうにかしなきゃ。150mlくらい抜いていたから、もう悲惨なものである。血が飛散して悲惨、なんちつて。

……笑えよ、おい。

駆血帯を外して針を抜いてから、洗面所にある雑巾を持って、台所に帰還。そして惨状を再び目にして死にたくなる。

「はあ。」

溜め息を吐いて、雑巾で床をふきふき。一気に雑巾が赤黒く染まっっていく。けれど結構びちゃびちゃに広がっているから終わりが見えないぜ。軽く洗って絞って、またふきふき。既に固まり始めているところもあるから、結構ごしごし拭かなくちゃならない。それに、母親が仕事を終えて帰ってくるまでに証拠を完璧に隠滅しなきゃ。

サイアク、サイテー、ファック。誰だ、こんなことしやがったのは。

私だよ知ってる。ごしごし。がちゃ。

「……がちゃ？」

や、ばい、かも。怯えながら振り返ると、そこには煙草を吸いながらダルそうに台所を見回す母の姿があった。その後ろには明らかに戸惑っている若い男、多分母の男が一人。思ったより帰ってくるのが早かったな、どこでもドアでも使ったのかな？ とか考えてる場合じゃない。

「死ね。」

母親はそう言っ、表情を全く変えずにてくと歩み寄ってくる。そして私は彼女が次に起こすアクションを知っている。それは私にとって酷く嫌なアクション。全くもってめんどくさい女だぜ。私とどっちがめんどくさいだろうな。

母親が右手を振り上げた。ブロックはしないで目を瞑る。ぱしんと私の頬が爽快な音が鳴らした。そして耳腔の中で耳鳴りが喚きだした。マイマミー、平手するのはいいんだけど出来るだけ耳に負担を掛けないような叩き方でよろしく。口の中が切れちゃうのはもう仕方無いって諦めてるけどさ。

って言うか、痛い。超痛い。思わず心の中で「マジあり得ないんですけど死んでしまえババア」とか罵っちゃうくらい痛い。え、痛いのはお前の頭だって？ 知ってるけどそれ以上に頬が痛いんだって。

「そんなことさせる為に生かしてるんじゃないやねんだよクソガキ」

……だそうです、母親曰く。じゃあ何のために生かしてるの？

いや知ってるけど

さて、実の母親に糞小僧と罵られたわけだけけど、どうすべきなのかなあ？ もしかして私って母親の肛門から生まれたのかな（笑）とか言っちゃう？ いややめといった方がいいな、今度はグーで殴られるに違いないから。

よし、こうなれば母親の心情を好意的に解釈してみよう。この人は多分帰ってくるなりイミフでジャンキーな光景を見てしまったシ

ヨックでつい激昂してしまっただけ。本当に私のことをクソガキだなんて思っていない。とか、仮定してみる。けど、勢いで言われたってさあ。私にだって心はあるんだよ。勢いよく私の心貫通しちゃったよ、あなたの台詞。

「バイバイ。」

私は注射針とか駆血帯とかあと飛び散った血とかその辺を全部ほったらかしにして、家を飛び出した。グッバイ、マイホーム。

+++

2：奥様は売春婦、姉様は自殺済。

例えば、あなたが生まれてすぐに父親が事故で死んだでしょう。

そして母親が売春婦へと身を落としたとする。

それだけではない。

あなたの母親が知らない男を家に連れ込んで情交に耽っている姿を見てしまったなら。母親に「あんたさえないなければ同棲出来るのに、ほんと邪魔な子。」と顔を歪めて罵られたなら。あなたはどんなってしまうだろう。

私はそんなサイテーな環境で育ってしまった。子供は親を選べない、と言うけれど、もし選べたとしたらもつと幸せな家庭に生まれてもつと真っ直ぐに育ちたかった。どこか、幸せな家庭で。そんなこと言ったところでもうどうしようもないんだけど、さあ。

じゃあ死ねよ、と言う人もいるかも知れない。辛いなら死んでしまえよ。アム力を繰り返して瀉血を繰り返して、こんな人生嫌だつて喚いて、その癡死のうとしがないなんてただの構ってちゃんじゃ無いかつて。だけどそれでも私は生きていたいんだから仕方無い。構って欲しいわけじゃ無い、生きていたいだけ。

死にたくない。生きていたい。そう思うのはきつと人間である以上当然のこと。その執着さえ失くしてしまえば人はきつとヒトでは

なくなつて、ただの動く死体になる。アニメイト・デッド。

私の姉は、そう言った類の人間だった。私が生後三ヶ月の時に父親は死んだ。私が生まれる丁度一年前に姉は生まれたから、姉が一歳三ヶ月で父親を失つたことになる。私程では無かつたにしてもまだまだ幼い、と言うかまだ幼児だった姉。そんな彼女は、私の数十倍は酷い仕打ちを受けて、そして壊れた。いつも、黙っていた。いつも、どこか遠くを見つめていた。いつも、諦めていた。

いつも、死んでいた。

ただ生命活動を行っているだけの死体。何にも関心を持たず、何にも感動せず、何にも傷つかず。何もしようとしなかつた。自殺、さえ。

そして彼女は拒食症だった。華奢、と言うより死にかけの身体。触つただけで折れてしまいそう。そんな身体で姉は去年まで援助交際を行っていた。男に抱かれ、好き勝手に身体を触られて。そうやって彼女が体を売って稼いだお金は、全て母親が使った。ブランドのバッグに、ブランドの時計に、ブランドの服に。でも、姉は何も言わなかつた。きっと、何も感じてすらいなかつた。姉にとって自分の身体がどうなるかと自分の稼いだお金がどうなるかと、きつと興味の無いことだったに違いない。

そして一年程前のあるある日、売春行為が学校に発覚した。母親は、しらばつくれた。私は知らない、この子が勝手にやってただけと。そして姉は何も言わなかつた。何を聞かれても何も言わなかつた。バカじゃ無いだろうか、と思う。何で母親みたいなクソババアを庇つたんだよって。今考えれば庇つたわけじゃ無くてどうでもよかつただけなんだろうけど。

そんなアパシーだらけの姉であるユリは、しかしその翌日突然死んだ。大体分かんとは思うけど、自殺だった。最後まで何も言わないまま、シヨットガンで頭を打ちぬいて死んだのだ。二十七歳で自殺したニルヴァーナのギターヴォーカル、カート・コバーンと同じように。極めつけに、机の上には遺書みたいなメモが置かれていて、

「I always knew it'd come to this / Things have never been so swell / I have never failed to know you're all right」からの引用。こうなることはずっと分かっていた。こんなに素晴らしかったのは初めてだ。

全然素晴らしくねえよ、死んでどうすんだよ。私は泣いた。ユリの血みどろ死体を眺めて泣いた。あと吐いた。さらにはバカヤロウと罵った。まだカートになるには十年早いんじゃないか。だってまだ十七歳だったのに。そしてユリの真似をして引用してみた。

「She just wants to love herself」

彼女はただ自分自身を愛せるようになりたかっただけなんだ。死ぬことによって。なんてね。

+++

3：包帯クラヴ。

グッバイ、マイホームなんて格好つけて飛び出した私だけれど、所持品は、登校するつもりで着用していた制服と、そのスカートのポケットに入っていたマツシールームだけ。ケータイも、財布も、持っていないぜ。羨ましいだろう。

それと、十一月の朝は寒い。寒い上に、急に飛び出して来たからコートも何も羽織っていない。つまりクソ寒い。私は震えた、ぶるぶるとケータイのバイヴレーターのよう。上着を買おうにもまだ服屋は開いていないしそれ以前に財布を持っていないから、耐えるしかない。本当にサイアクだ。これもあのクソババアの所為。本当にさっさと死んでしまえばいいのに。

「あ、そうだ。」

私はふと思い立ってポケットのマッシュルームの粉末を取り出した。学校の友達に貰った魔法のマッシュルーム、つまりはマジックマッシュルーム。個人的にはマジックマッシュルームと言うよりミラクルマッシュルームと言うイメージなのだけれど、こればかりは昔誰かが決めた名前なわけだからどうしようもない。そんなことはどうでもよくて、この魔法きのこを飲めば寒さなんて気にならなくなるんじゃないだろうか、と思ったわけである。私ったら本当に天才！ 丁度すぐ近くに公園もあるから、その水道の水で飲めばいいし、と思っただけである。私ったら本当に超天才！

早朝の公園には、ホームレスの方が数人と、昨日酔い潰れて寝たらしいサラリーマンが一人いた。そしてホームレスの人が気づかれないようにサラリーマンの財布を盗んでいた、のを私は無視した。知ったこっちゃねえや。

水道の蛇口をきゅいきゅいと捻ると出てくる冷たい水。きのこ粉末を口の中に入れて、手で掬った水で流し込む。初めて飲むマジックマッシュルームの味は、何だか微妙だった。それ程不味くも無いような。でもくれた友達に舌嚙んで死にそうになる程不味いとか言ってたような。はて、私の味覚は狂っているのだろうか。まああんな淫売女の肛門から生まれたんだから狂っててもおかしくは無いような。ああ、自分で言ってる悲しくなってきたぜ、ららら、ららら飲んですぐに効くわけも無いので、私はしばらく滑り台に寝そべってきのこ君がキマってくるのを待つことにした。

仰向けになったところで夜じゃないから星は一つも見えない。どうせ夜だったとしても見えないんだけど。だって都会だし。溜め息を吐いて目を瞑った。星が見えた。ファック、私の狂った脳め。ああ、このまま通りかかったレイプ魔に犯されてしまえば満たされるのかな。ろんりーろんりーれいぷみー。

……効かない、全然効かない。全くうひゃうひゃ出来ない。テン

シヨン低いままだし。味だってそこまで不味く無かったから、もしかしたら偽物を掴まれたのかもしれない。あの野郎、レイプ魔に犯されてしまえ。そして私は諦めて帰るしかねえ。

でも、帰りたく無いなあ。あのビッチのいる家になんて、戻りたく無い。戻ってしまえば私はどうしようも無くあいつの娘なんだ、あの最低に美しい売春婦の。私は私、母親は母親、なんて言ってみたところで私はあいつのデーエヌエーを死ぬ程受け継いで生まれてきたわけで、おそらく私の身体を流れる血の半分どころじゃなく十分の九くらいはあいつの血で、いやもつと多いかも知れないな、とかまあ細かい話はどうでもいいけれど私は要するにあいつと同じ、卑しい存在なのだ。もしかしたら私があいつを嫌いなのは同族嫌悪だったりするのも知れない。

だけど、だけど。外にいれば、私は単なる女子高生のキリになる。あいつのは何の関係も無い私になれる。だから帰りたくは無いんだ。けれど、帰らないわけにはいかない。ケータイも無い、財布も無い、身体に染みる寒さを防ぐ上着も無い。そんな私がどうやって生きていく？

「エンコーは絶対にしたく無い。」

それをしてしまえば私は本当にあいつと同じになってしまうから。いっそのこと一生セックスしないまま死んでしまえばもしかするとあいつとは違う存在になれるかも知れない。

数分後、結局諦めて公園を出た私が目撃したのは、車に轢かれかけて照れ笑いしている包帯だらけの女子高生だった。その顔は、表情を除いて限りなく私に等しいのだった。

プロローグと「1：タ立のように。」と「2：奥様は売春婦、姉様は自殺済。」

サヴタイトル、プロローグがエピソードになってました。初っ端からエピソードかましてどうするつもりだよ……。

「4：染色体の勝利、私の敗北。」と「5：包帯ラヴ。」と「6：神は逆立ちす

4：染色体の勝利、私の敗北。

母は美人だ。無駄に美人だ。多分男だったら皆、すれ違った後振り返ってしまう程に美人だ。きっと父もその一人だったに違いないと思う。そしてそのまま惚れてしまったんだろう、愚かなことに。だから二人は結婚して、父は死んでしまった。

当時の記憶なんて勿論ほとんど残っていないけれど、一つだけ、脳の奥で遠慮がちに佇んでいる映像がある。燃える車の中で私とユリが泣いていて、父は頭から血を流しているのだ。そしてその身体を叫びながら揺さぶる母の姿。父が死んだ時どんなだったか、親戚の人に聞いても皆口を濁すけれど、きっとこの記憶は事故のメモリーなんだと思う。ただこの記憶にもおかしな点が二つあって、ひとつは父の顔がいつものっぺらぼうのまま再生されること、そしてもうひとつ母が父を揺さぶりながら泣いていること。もし本当に彼女にそんな人間らしい愛があつたなら、私だってもう少しまともに育っていたさ。

母は美人だ。無駄に美人だ。そしてその顔立ちが残念なことに私にも引き継がれていた。とか言ったらまるで自意識過剰みただけれど、どう見たってそっくりなんだから仕方無い。その所為で小学生の時から何人も男子に告白なる行為をされてきた。多すぎてもう数えるのもやめてしまう程に。

だけど、年を経るごとに美しくなっていく自分の顔が、死ぬ程嫌いだ。だんだん、美しく、醜い母の顔のようになっていく。その内性格まであんな風に真っ黒にすすけて穢れてしまうように思えて、いつそのことあり得ないほど地味な顔に生まれたかった、なんて。母親のスタイルの良さが私に引き継がれていないことだけが唯一の

救いである。胸、無いし。

そしてユリもまた美しかった。ガリガリに痩せてもなお男どもが彼女の身体を買ったくらいに。

けれど母親には全く似ていなかった。母親の様な妖艶な美しさではなく、ただただ清楚な、野原にワンピース姿で立っているのが似合うような真つ白な美しさだった。

私は許さない、あの美しいユリを男に何度も穢させ、ぶっ壊した母親を。

+++

5：包帯ラヴ。

「いちいち帰ってなくていい。つつか帰ってくんな、むしろ死ね。保険が下りるから。」

マンションの1017号室つまり我が家のドアを開けると、そこにはハイヒールを履いている母親の姿があつて、その女は私の顔を見た瞬間顔を歪めて憎々しげにそう言った。歪めてもなお美しいなその顔がイラっとくる。と言うか実際ユリはこいつの所為で死んだわけだから洒落にならない台詞だぜ。そう言えばユリが死んだ時つて、どのくらい保険下りたんだろ。自殺だったら下りなかったりしないのかな。どうでもいいな。

「ヤリに行くの？」

母親は煌びやかな服に身を包んで、しっかりと化粧をしていた。もともと美しい彼女をさらに昇華させる化粧。その妖艶な雰囲気、何と無しに母親が今から男に抱かれにいくことが分かった。金と引き替えに自らの身体を捧げるなんて、バカじゃないの。

「あんたの為に稼いでんのよ。あんたもさっさと金稼ぎな、女子高生で処女なんて死ぬ程高く売れるわよ。」

鼻をふんと鳴らしながらそう言う母親は本当に死んでしまえばいいと思う。

「私は絶対にあんたみたいな女にはならない。」

そう吐き捨てて、靴を脱いで玄関から上がった。すれ違いざまに母親がバカにしたような声で「何言ってるの」と笑った。

「年食うごとにあたしそっくりになってる癖に。」

私は心に纏わりつこうとするその呪詛を振り払って、いや実際のところ振り払えずに吐きそうになりながら、さっき会ったもう一人の私のことを思い出していた。あの轢かれかけた包帯女。あとギブスもつけていたような気がする。あいつ、本当に私とそっくりだった。死ぬ程そっくりだった。もしかしてドッペルゲンガーって奴なのだろうか。そうだったとしたらどっちか死ななきゃならんわけだ。私は死にたくないから今度会ったらあいつを殺すことにしよう、よしそうしよう。なんちって。

「って言うかそっくりすぎて気持ち悪かった。」

何が気持ち悪いって、アレだ、私の顔で照れ笑いなんかするなよマジ気持ち悪い。私の顔で許されるのは無表情と仏頂面とブチ切れ顔と自傷中の弛緩した笑顔だけなんだって。

「こんな感じだったっけ？」

真似をして、にい、と笑ってみる。「いてて」頬が攣った。笑うって意外と高等技術なのな。まあ練習する必要も無いよね、使う機会が無いし。えへへ。あ、また頬が攣った。

+++

6：神は逆立ちすると犬になる。

神様が嫌いなわけじゃ無い、とユリは言った。確かそれは、彼女が生ける屍になって随分経った頃、確か死ぬ一カ月程前のことだったと思う。その頃にはもうユリの声を聞く機会などほとんど無かつ

たから、私は耳に安ピンでピアス穴を開けようとしていた手を止めて、神経を彼女の声に集中させた覚えがある。中途半端に刺さった針が少しだけ痛かったような覚えも。

「神様が嫌いなわけじゃ無い。」

ユリはもう一度そう繰り返して、それからまた何も喋らなくなってしまった。けれど声を発している時の彼女の表情は珍しく感情を含んでいて、その感情は、いまだにどんな感情なのか確信に至ってはいないけれど、ただとにかく切迫した何かだった。

きっとユリは神様が嫌いで、だけどそんなんじゃあまりにも救われないから、わざと逆のことを呟いて、神様を、そして世界を愛そうと努めているのだ、とその時の私は思った。けれど、今あの時のユリの顔を思い返してみればそんな感じでは無かったような気がするのだ。無理をして嘘を吐いている、と言うよりかは、神様を嫌ってはいいないと言うことを口に出して誰かに伝えておかなければいけない、と言うような。

けれど、普通に考えて彼女は神様を恨まなければやってられないような状況にいたわけで、と言うか私はもうすっかり神様と言うモノを恨んでいるわけで、ならどうしてユリはあんなことを言ったのだろう。それがいくら考えても分からないのだった。ただ何と無く彼女はおそらくあの時既に死ぬことを決めていて、だからこそあの言葉を言ったのではないかと言う気がするから、いつかその真意を理解して、受け止めてあげなくてはならないと思うのである。そして、それが果たせたなら私はきっと彼女が死んだ理由を知ることが出来るのだ。辛い世界からの逃避だとか母へのささやかな反抗だとかそんなありがちな理由では無くて、もっと心の奥深くに潜む、ブラックホールの如き何かを。

+++

7：おむすびげろりん。

朝帰ってくるなり連れてきた男とベッドにインした母親に行ってきますと吐き捨てて家を出た私は勿論学校には向かいませんでした。まる。じゃあ何処に向かったかと言えば当然この間行った公園です。まる。何で公園に向かったかと言えば当たり前ながらドッペルゲンガーさんに会う為です、エクスクラメーションマーク。割と今まで真面目に通っていたから出席日数とかの心配は無いのです。勿論、公園に行ったからって瓜二つさんに出会える保証があるわけでは無いけれど。

公園に着いて辺りを見回しても、そこには昨日と同じように酔い潰れて爆睡中のサラリーマンとその財布を現在進行形で盗んでいるホームレスのおっさんしかいなかった。大体予想は出来ていたけれど、それでも少しテンションが下がる。いや少しじゃ無くて死ぬ程下がったけど。深い溜め息を吐く。ついでに血も吐きたいと思つて肺の辺りの血管に力を込めてみる、みる。だけど勿論血管を自分の意思で操って破ることなんて出来るわけも無くて、ただむせるだけで終わってしまった。ちくしょう。咳き込んだ所為で眼球を涙が薄く覆つて影が滲む。滲んだ所為で何だかもう一人、私の後ろに誰かが立っているような影の形に見えた。

「ボク発見！」

……見えたと言うか普通に後ろに立っていた。こっくりさん、じや無かった、そっくりさんが。包帯だらけ、ギブスだらけ、ついでに右目に治療眼帯。肌色よりもよっぱど白色の面積の方が大きいぜ、こいつ。

「昨日私が轢かれ損ねたところ見てたよね、キミ。ボクにそっくりだったから気になってたんだ。」

どうやらもう一人の私は自分のことをボクと呼ぶ少し変わった子らしいです。いや、今の時代だと別に珍しくは無いのかな？ 学校の女子制服がズボンになったりする時代だし。

「ちよつと喋ろうよ。」

「いいけど、私はあんたを何て呼べばいいの？ 人間の屑とか？
それが人間未満女とか？」

「ボクはヒサ。キミは？」

「うわこいつ完璧スルーしやがったとか思いながら「キリ」と答えると、ヒサは少し驚いた顔をして、それからにい、と笑った。気持ち悪いな。」

「へえ、ボクの名前は木の『桐』って書いてヒサって読むんだよ、何だか似てるね。」

「私のキリは木の『桐』じゃ無くてもやもやした『霧』だから全然違う。」

「ごめんなさい今名前にまで共通点があるのが嫌で嘔吐しました、くそつたれ。」

「あ、そうだ。」

「包帯だらけのヒサはきゅぴーん、と頭の上に豆電球を灯していきなり鞆をがさごそ、がさごそと漁り始めた。ドラえものの秘密道具でも出てくるのだろうか。それなら是非ほんやくコンニャクあたりをお願いしたい。目の前の包帯女とまともな会話が出来るようにになりたいから。」

「一緒に食べようと思っておにぎり作ってきたんだ！ はいこれ。」
「まともな、会話がしたかったのに。」

「差し出されたおにぎり。私は手を振って首を振った。シエイクシエイク、ベイベー。そして少し強い口調で断る。」

「いやお腹空いていないからいいよ。」

「いやお腹空いてなくてもこんくらい食べれるって。ほらほら、別に不味くないから、多分！」

「私以上に強い口調で言い切られた、主に「多分」と言う単語を。凄く不安。と言うか地雷臭しかない。ただ私が断ってるのは別にそう言う不味そうだからとかそんなじゃ無くて、とか心の中で叫んでいたヒサがおにぎりを包んでいたラップをぺりぺり剥がしました。」

「いやだから本当にお腹空いてないんだって」

「いやだから本当にお腹空かせてよ今すぐ。」

誰か、誰か、私にほんやくコンニャクを！ どうせ食べられないけどな！

「はいどうぞ」

屈託の欠片も無い笑顔と共に私の口にぶち込まれるおにぎり。おにぎり。おにぎり。もしかしたら食べれるかもしれないな、なんて夢を見て齒を立てる。そして妙に味気ない米の粒が口の中で広がる。大丈夫、大丈夫、腐ってない筈。おいしいおいしい手作りおにぎり。だから大丈夫。

だいじょうぶ。

妙に酸っぱい胃液の味が口の中に広がってもう私は駄目になって勢いよくおにぎりと胃液を吐いた。

「8：美女と野獣及び白濁した体液。」と「9：エンカウント。」と「10：」

8：美女と野獣及び白濁した体液。

「やつぱり。」

ひたすら嘔吐を続ける私を見下ろしながらヒサが笑っていた。笑うなブス、と罵ろうと思ったけれどヒサは残念なことに私に似て美女なので、というかそれ以前に嘔吐中で罵れなかった。

「痩せ細ってるから何となくそうなんじゃ無いか、って思ったんだ。それで確かめてみたんだけどね。」

私がモノを食べられなくなったのは小学六年生の時だった。それまでも兆候はあった。食べ物を見ると急に空腹感が消えて気分が悪くなったり。でも無理矢理胃の中に放り込めば何とかなった。たまに食べたものが込み上げてくることもあったけれど、それも飲み下せば問題無かった。

けれど、今は何も食べられない。見るだけでもう駄目。サプリメントで何とか生きながらえているけれど、そんなもので体調が維持できるわけが無い。その上瀉血なんかやるから、よく倒れるのだ。

これも全部、決してあいつが母親とは認めたくないあの母親の所為。土曜日だった。まだゆとり教育が始まっていなかった頃だから土曜日も三時間目まで授業があつて、私はその三つの授業をしつかりと受けてから帰宅した。帰り道は、家々から昼ご飯の匂いがして酷く哀しかったのを覚えている。だって、我が家の母はもう何年も私にご飯を作ってくれていなかったから。

まあそんなことはどうでもいい、どうでもいい。とにかく私は帰宅して、そして自分の部屋に入った。私とユリの共用だったその部屋と母の部屋は隣同士で、だから母が、連れ込んだ男と喋っている声もよく聞こえたのだ。「あの子たち本当に邪魔」と言う声。

「金食うしか能が無いのよ。」

真っ黒な声で母が呟いた。私より先に帰っていたユリは、部屋の隅っこで耳を塞いで蹲って震えていた。私は拳を握りしめる。

「でもお前、一応捨てずに育ててるだろ。結局大事なんじゃ無いの？」

母の男がからかうような口調でそう言った。私は馬鹿なことに、本当に馬鹿なことに、その問いに対する母の答えに、何か優しいものを期待をしていた。「あ、バレた？」とか「まあ何だかんだあたしの子供だから」とか。死ぬ程馬鹿なことに。そんなの、考えなくてもあり得ないって分かる筈なのに。

「馬鹿じゃないの、綺麗に育てとかないと身体売れないでしょ。」

「……あ。」

ばん。私の中で何かが弾ける音がした。そして私は死ぬ程、死ぬであの世に行ってまたあの世でも死んじゃう程馬鹿なことに母親の部屋へと入って行ってしまったのだ。自分の生活領域を犯されるのが死ぬ程大嫌いな母の部屋へ。あ、間違えた、死ぬ程じゃ無くて殺す程だった。

驚く男。いつも不機嫌な顔から機嫌成分をさらに抜き出したような顔をする母親。むしろ不機嫌100パーセント濃縮還元的な。

「死ね」

四秒と三分の一くらいの沈黙の後、静かに母親はそう言って、私の体はいとも簡単に吹っ飛んで壁に叩きつけられた。思い切り殴り飛ばされたと感じたのは七秒と五分の四くらい後になってからだった。

見上げると、母は床にうずくまって痛みに耐えている私を全く感情のこもらない冷たい目で見下ろしていた。私は痛みと恐怖で嗚咽を上げながら泣いた。そんな私の背中に母親の足が乗る感触。

「ねえ、こいつ犯していいわよ」

男の足元に蹴り飛ばされて、鳩尾に衝撃がぐわつと来て吐きそうになる。

「処女は高く売れるだろうから挿れちゃ駄目だけど、口とかなら使
つていいから。」

恐る恐る男の顔を見上げた。男は、にたあ、と言う効果音が聞こ
えて来そうなくらい笑っていた。にたあ。

それからあまり覚えていない。ただ、気付くと私は裸で床に横
たわっていて、口の中には苦くてドロドロした気持ち悪いモノが溜
まっていた。ただただ気持ち悪くて体中がだるくて動くことすら出
来なくて、そうして私は何かを食べると言う行為が出来なくなつて
しまったのだった。

+++

9：エンカウント。

「俺三年のフルタタスクなんだけど好き好き大好きマジ付き合つて
くれ。」

油断してた。思いつ切り油断してた。ここ数カ月全然告白とかさ
れて無かったから、まさか三日ぶりに学校に来た瞬間階段で告白さ
れるとは思ってませんでした、はい。顔を見るとなかなかのイケメ
ン。眉毛無いし、ピアス私より大量に開いてるし、あと前髪無駄に
長いけど。

「とりあえず、聞きたいことがあるんだけど聞いていい？」

「任せてくれ！」

「今もう授業始まつてるよね」

「授業よりキリの方が大事に決まつてるじゃ無いか！」

うわ、超いい笑顔で断言された。キモっ。ちゃっかり下の名前で
呼び捨てだし。今まで告白してきた男子の中では珍しいタイプ。と
言うかキモっ。もう少し柔らかめの表現をすると……キモっ。ごめ
んこれ以外思い浮かばない。

「あの、す」みませんと謝って断ろうとしたその時、「おいお前ら

授業に行け」と言う教師の声が聞こえた。振り向くと理事長がそこにいた。学校のパンフに写真載ってた87歳のおじいちゃん理事長。何で理事長がこんなところ歩いてんだよ、と突っ込もうとして理事長の服装が目に入って私は言葉を失った。何で学校の制服着てんだよ、しかも女子の。

「じゃあ俺は授業行ってくる。昼休み返事聞きに行くから、考えといてくれ。」

「あ、ちよつと、待って」

……行きやがった。断ろうと思ったのに。ああ、今から昼休みのことを考えると頭が痛い。こんな人の話を聞かない野郎相手に断ったところで「あれか婚約者でもいるのか安心しろそんな奴俺がぶっ飛ばしてやる」とか言いだしそう。

けれど、その心配は杞憂に終わった。何故なら。

「で、付き合ってくれる？ マジ大好きなんだけど。」

そんなバカ野郎が昼休みまで待つ筈も無かったからである。まだ一限目の休み時間だったのに、教室に飛び込んできやがったのだ。イケメン上級生がいきなりそんなことすりや当然周囲の視線が一気に突き刺さる。ぐさぐさ。血とか、出そう。

「とりあえずここじゃ何ですからどっか別の場所に行きましょう」視線から逃げるために教室からゲッタウトしようとバカ野郎の手首を掴んだらさらに視線を集める羽目になった。もう勘弁してくれ。

「なら俺に任せてくれ、とっておきの場所があるのさ！」
もう、勘弁してくれ。

++

10：フォーリンフォーリン。

ヒサにおにぎりを無理矢理食べさせられて結局食べれなくて吐き散らかした夜。嘔吐が治まって気持ちも治まって私はヒサと喋っていた。主に互いの家の話を。「一人っ子だからお母さんがとっても優しくしてくれる」らしいヒサは、私が母に酷い扱いを受けて姉に先立たれて自傷行為にのめり込んでいることを聞いた瞬間目を輝かせて「見せて見せて」と飛び跳ね出したのだった。こいつ頭のネジ数本は飛んでるな。

袖をまくって傷痕とか針の痕とかを見せつけると、ヒサは「うわ、酷いね」と笑った。こいつ頭のネジ数十本は飛んでるな、と私は溜め息を吐いて俯く。するとそこにはちょうどいい具合にネジが落ちていた。

「あんたの頭のネジ、焼け石に水かも知んないけど少しだけ戻してやる」

「駄目駄目それ本当に駄目洒落にならないから！」

あ、逃げられた。

「って言うか何でリストカットとかするの？ 痛いじゃん。」

「リスカじゃ無い、アム力。」

「そこはどうでもいいってば。」

よくない、すっごい大事なところ。リストカットなんて怖くてできないし。

「うーん、よく分かんないけど、血液を見てると生きてることとか愛とか色々感じて気持ちいいからじゃねーのって感じ。」

「つまり愛液だね」

「死ね。」

こいつ、無邪気キャラを装って下ネタを吐きやがった。流石私のドッペルゲンガー、一応知ってることは知ってるのなあ。

「って言うかあんたこそ何でそんなに怪我ばかりしてんのさ。」

ヒサの左腕の包帯が巻かれた場所をぐにぐにしながら聞いてみた。だって普通こんなに怪我しないじゃん。この間だって私の目の前で車に軽くぶつかられてたし。

「あー、ボク反応鈍いからさ、危ないって思っても逃げられないんだよねー。」

そう言えば轢かれているのを見た時も、近づく車の方を眺めたまま凍りついてたもんなあ。あれじゃあ逃げらんねえよ。

「多分ボクその内死ぬよね。」

「死ぬんじゃない？ 後数年の内には。」

「うーん、でもどうせ死ぬなら事故じゃ無くて自殺とかの方がいいかも。」

…… 危ない危ない、もうすぐで本当にネジを突き刺しそうになるところだった。でも本当に突き刺してあげた方がいいかもね、姉に自殺された奴の前で自殺がいいとか言いだすようなクズ野郎は。

「死ぬならねー、あつこのビルがいいなー。」

彼女は少しだけいつもとは違う妖しい表情で、近くの高層ビルを指差した。私はその指の先を眺めながら「本当に落ちて死んでしまえばいいのに」と罵ったのだった。

+++

11：ラヴ&セックス

「とっておきの場所があるのさ！」と張り切ってフルタスク、略してフルタスクが連れてきたのは保健室だった。保健室の中には驚くべきことに誰もいなかった。いや養護教諭いるよ。おかしいだろこの学校。

「で、返事を聞かせてくれるかい？」

ずい、と顔を近づけてくるフルタスク、に爽やか成分を足してみるとフリスクになるよね。どうでもいいね。あと、「ずい」って何となく「ずわいがに」と似てるよね。え、似てない？ ああ、そう。とか心の中で呟いて直面した現実から逃げようとしたけれど、フリスクはずっと私のことを見つめている。私は自分を誤魔化すのをや

めてフリスクと向き合うことにした。

「先輩、フリスクって呼んでいいですか？」

「ごめんやっぱり向き合えませんでした。」

「キリがそう望むのなら構わないさ。」

意味の分からないことを言い出した私を、意味不明な寛容さで包み込むフリスク。私は観念した。流石にもう逃げられない。そしてフリスクになら任せてもいいと思った。

「フリスク先輩。」

「何だい？」

「私のこと愛してますか？」

「え？ な、何を急に言い出すんだ。」

フリスクは目に見えて動揺し出して、私は少し失望した。フリスクならきつと迷わず「愛してる」と答えてくれる筈だと期待していたから。まあでもよく考えればいきなり愛してるかなんて聞かれたらそりゃ戸惑うよねえ、仕方無い。

「好きだけど、大好きだけど、愛しているとよく分からないと言
うか」

「愛してるんですかしてないんですか」

「……愛してる。」

「愛してるなら抱いてください。」

空気がぴしつと凍って、それからフリスクはあたふたし出して「え、ちよつと、何でいきなりそう言う方向になるんだ」とか呟き出してとりあえず大変なことになった。私はそれを冷めた目で見つめる。私はフリスクになら任せてもいいと思ったのだ、私の処女を奪う役を。母への復讐の為に。

まだ混乱しているフリスクを待たずに、ベッドにごろんと横になって、それから制服の裾をちよつと上げたりして誘惑。こう言うのを何の違和感も無く出来てしまう私はやっぱりどうしようも無くあいつの娘なんだけれど、でもあいつとは違ってこのセックスには愛があるから。私からフリスクに対してはともかく、フリスクから私

に対しては、愛があるから。ラヴ。ラヴ&セックス。あんたとは違う、あんたとは違うんだ。

やがて、フリスクはまだ少し戸惑いながらもベッドへと上がって来て、私の唇を奪った。初めは触れるだけのキス。そして、それを何度か繰り返した後に舌が入ってきた。私は目を瞑る。強く、強く、目を瞑る。身体を彼の手が撫でた。胸。足。鳥肌が立った。びくんびくんと身体が痙攣した。

「感じてるのかい？」

吐き気。耳をくすぐる優しい声が、気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。気持ち悪い。けれど、私は今日ここで膜を失わなくちゃならないんだ。そして腕以外の場所から血を流さなくてはならない。私は必死に頷いた。感じている、と頷いた。幸い、私の股ぐらは濡れていた。気持ち悪くてたまらないのに愛液を分泌する膣。笑ってしまいそう、結局ディーエヌエーには勝てないって、ねえ。

「そろそろ挿れるよ。」

気がつけば私はフリスクに覆いかぶさられていて、彼の股間のそれが私の裂け目に触れていた。少しずつ私をこじ開けようとするそれ。私はもう耐えられなくなってフリスクを突き飛ばした。駄目、駄目、駄目。私の膜を破らないで、私を包む膜を。それが無くちゃ私は何か黒いものに侵されて生きていけなくなるから。

ワイシャツを羽織って、スカートを着けて、乱れたまま下着を着けることすらせずに逃げ出す。情けない格好で床に倒れながら「ちよつと待って」とフリスクが叫んだけれど、振り返ることもせずに保健室を飛び出した。ボタンを留めていないワイシャツの前がはだけて、近くにいた用務員が私を凝視しているのが見えた。

「8：美女と野獣及び白濁した体液。」と「9：エンカウト。」と「10：」

そろそろ鬱展開突入。これからラストまでは多分一気に進んでいきます。感想とか、気軽に書いていただけると嬉しいです。

「12：エンドクロール。」と「13：ヘイトフルプ。」と「14：ケンプ」

12：エンドクロール。

寒い。ワイシャツとスカートだけしか身に着けていない所為で冬の寒さが身体の芯まで忍び込んで、私はぶるりと震えた。そしてこれから行くところなど無いことを思っただけ泣きそうになった。

白く曇る息。何も考えずに踏み出した足は、確かに家を目指していた。帰りたく無い筈の家を。結局、いつだってそう。いくら私が嫌だと思っただけで帰るところはあそこ以外に無くて、頼る相手はあいつ以外にいない。いつだってそう。

きつとユリはそれを知っていたんだと思う。生きている限り自分のはあの家であの女に寄りかかっているしか無いと言うことを。それが死んだ理由の全てだとは思わないし、頭をぶち抜くきつかけみたいなものは他にあったに違いないと思うけれど、きつとそう言ったどうしようも無いことがいくつも重なってどうしようも無いくらいどうしようも無くなって死んだのだろう、と思う。今なら少しだけ彼女の気持ちが分かる。そんな気がした。

けれど私に死を選ぶ度胸なんてある筈も無くて。

家の中には人の気配が無かった。この時間ならいつも母がいる筈なのに。不思議に思いながら居間を覗く、台所を覗く、母の部屋を覗く。誰もいない。トイレにいるわけでも風呂に入っているわけでも無いのは、灯りがついていないのを見れば明らかだった。

別におかしな話では無い。あいつが出掛けていたって全く不思議ではないのだ、今までそう言うパターンが無かっただけで。ひたすら何度も家の中を探し回ってからそう気づいて溜め息を吐いた。その時ふと私の――私とユリの部屋に誰かがいるような気がして、私は急いで自分の部屋の扉を開けた。華やかな匂いが鼻腔をくすぐる。

ユリのような香り。

「誰も、いない。」

今日の私は本当にどうにかしている。正常じゃ無い。

だから机の上に置かれていたメモ書きを見て酷く動揺してしまつたのも、きっと何かの間違いなんだ。だって、ほら喜ぶべきことに決まってるし。

母親が病気で倒れた、だなんて。

+++

13：ヘイトフループ。

そのメモはどうやら母の男が書いたものらしく、達筆な文字で母が倒れたこと、相当ヤバくて助からないかもしれないこと、そして運ばれた病院の名前と住所が書かれていた。そして最後に「出来れば来てやってください」と、小さな文字で。

誰が行くものか。私が今までどれ程あいつに虐げられてきたと思っ
っているの？ そのまま死んでしまえ。私は心の中でただひたすら
母に対する呪詛の言葉を連ねた。誰が、誰が、誰が行くものか。死
んでしまえ、死んでしまえ。あの世でユリに詫びる。

けれど身体は心に反して何度も玄関へ向かおうとする。その度に
堪えて堪えて、でも堪え切れなくて身体が痙攣した。どうして。あ
いつなんて大嫌いなのに、どうして。

「ああ、そうだ。死なれる前に一発殴らなきゃ。」

私は病院に様子を見に行く理由を見つけて、家を飛び出した。

駆け付けた病室には意識が無いらしい母が寝かされていて、その
横に母の男と、もう一人、知らない女の人がいた。その知らない女
の人は部屋の入り口で立ち尽くす私を見てにこりと笑った。

「ああ、来てくれたんね。」

「あの……どなたですか？」

脳内を引つ掻きまわして記憶を辿っても、目の前の女性に該当する知り合いはいない。と言うことはきっと母の知り合いに違いない。「あーあたしは、何て言うかな、そこで寝てるキミの母さんの妹的な。」

私は絶句した。母に妹がいるなんて全く聞いたことも無かったから。と言うか、あの母に家族と言うモノが存在することが信じられなかった。普通に考えれば家族がない筈は無いのだけれど。

母の妹、と名乗った女性は凍りついた私を見てまた顔を綻ばせた。少し意地悪で悪戯っぽい笑顔。私と母には欠如した豊かな感情。恨む感情だけならきつと圧勝だけど。

「妹っても血の繋がった妹とかじゃ無くて妹分みたいなものね。中高一貫の女子校に通ってた時に美術部の先輩後輩やったんさ。姉御にはすっげー可愛がってもらったんだけどね。姉御が高一であたしが中三の年の冬に全然喋って貰えんくなって今に至る。あたしはずっと姉御のことを好きやったから絡みに行ってたんやけど無視され続けてねえ。切なかったぜ。」

そう語りながら母を見つめるその目はおどけた風に歪んでいたけれど、その奥に潜む寂しさみたいなモノを感じて私は切なくなつた。想う人に裏切られる哀しさは私も知っているから。何も食べられなくなつたあの日のあの気持ち。世界が真っ暗になって足下の地面が無くなるような不安と恐怖。

「何があつたんですか、その時に。」

「姉御の実際の姉が自殺したんよ。エンコーが学校にバレた翌日に。」目の前が真っ白になると言うのはこのことだ、と私は他人事のよう思った。偶然にしてはあまりにもよく出来た話すぎる。いや、逆か。あまりにも酷い話。哀しみと憎しみは繰り返す。ヘイトフル・ループ。

「今のキミが、あと一年前までのキミの姉さんがどんな生活を送っ

てきたのかは大体知ってる。けどね、それを同じ生活を姉御も送ってきたんよ。父親に早く死なれて、母親にボロボロにされて。違うのは、姉御はキミの倍近くの年月そう言う思いをして来たってこと。」

それから彼女は深呼吸をしてから、私の目を強く見つめて言った。「許してあげるとは言わないさ。けどね、これはあたしからのお願いなんやけど、キミが姉御を支えてやって欲しい。姉御も、寂しい人なんよ。」

+++

14：ケンプファッカー。

母の男も帰って、母の妹分だったサヤカさんも帰って、病室には私と母の二人きり。病室の中はエアコンから排出される生温い空気で満たされていて、頭がガンガン痛んだ。ついでに視界までぐるぐる回り出してこれはもうエアコンの所為じゃ無いんじゃないだろうかとか思ってしまう程に吐き気がした。

母は苦しそうに目を瞑ってピクリとも動かない。今きつと三途の川辺りで身体を売っているんじゃないだろうか。それが閻魔大王に身体を捧げて地獄行き回避とか。まあ何にせよどうせサイテーなことをやっているだろうからどうでもいいや。

「どうでもいいや。」

声に出してみる。どうでもいい。このクソババアのことなんてどうでもいいから私はさっさとこの空気の悪い病室を出て家に帰るべきなのに、どうして身体が動かないんだろう。

母の顔を見つめてみる。こうやってじっくり見るなんてずっと無かったから気づかなかったけれど、いつの間にか美しい母の顔は酷くやつれていて、目の下には濃い紫色のクマが住みついていていた。

母はいつも戦っていた。私には母親が一体何と戦っているのか分

からなかったし、きっと母親自身も分かっていたんじゃないだろうか、と思う。分かっていたらまだ勝算はあったのだろうけれど、現実はどうして負けて意識不明の重体だ。私はいつも母親と、その血と戦ってきたからこうやって生きてこれたけれど。

さつきサヤカさんに渡された便箋を右手で握り潰した。

「そのまま騙していてくれれば私はあんたを恨んでいるだけでよかったのに。」

涙が頬を這う感触。私は泣きながら、お母さん、と呟いた。

+++

15：ロストリガー。

フラフラと病院から脱出して、フラフラと行くあても無く歩く。

もう人生の行くあてなんて欠片も無いって、ねえ。恨む対象すら失くしてどうやって生きて行けば。ユリが死んだ理由の最後のピースが埋まったのを感じた。全部分かったよ、無気力だらけのユリがトリガーを引いたそのわけが。これでお母さんが死んで私も飛び降りか何かで死んだら向こうでは上手くやっていけるのかな？

クラクション。気がつくと横断歩道の真ん中で立ち尽くしていた。這いつくばるように車道から抜け出す。ぐるぐる、ぐらぐら。脳味噌が頭蓋骨のなかで暴れ回っているみたい。ふらふら、ふらふら。ヒサの声。気がつくと公園の真ん中でうつ伏せに倒れていた。内臓を吐き出すように嘔吐する。ぐるぐる、ぐらぐら。脳味噌ごと吐いてしまいたい。

「酷いことになってるねえ」

ヒサはころころと笑いながら面白そうにそう言って、くるくる、くるくるとバレエを踊るように回り出した。

「ねえ、いい提案があるんだけど。」

「……何？」

「今からちよつと入れ替わってみない？」

思考が停止した。ついでに脳味噌も停止して、ぐるぐるぐらぐらと吐き気が治まる。

「ねえ、いいでしょ？　うちの家族、優しいし。きつと楽しいよ。」

その選択肢を選んじや駄目、と誰かが叫んでいるような気がした。それは逃げでしかないから。ユリの死も、お母さんの想いも、全て無駄にになってしまうことになるから。それは駄目。駄目。

私は引鉄を引くように口を開いた。

「いいよ。」

口を開いて、全てを捨てた。

「12：エンドクロール。」と「13：ヘイトフルプ。」と「14：ケンプフ
自らを虐げる存在に頼って生きてくしか無い絶望。恨みを糧に生き
てきたのにその恨む対象を失った時の空虚。そう言うノリ。

今回はサブタイトルを英語二つを合わせた感じに統一。ケンプファ
はドイツ語だとか突っ込まないでください。

感想とか点数とか頂けると泣いて喜びます。

多分次で完結です。

「16：哀状フィクション。」と「17：潰楽エンターテイメント。」と「18：

16：哀状フィクション。

ヒサに渡された地図を左手に、彼女の家を目指す。変装の為に身体中に包帯を巻かれて何だか気持ち悪かった。ついでに右目に治療眼帯をつけている所為で上手く距離感が測れない。と言うか包帯の巻き方も適当だしギブスとかもつけてないしこれで本当にバレないのだろうか。それをヒサに聞いたら「大丈夫、お母さんテキトーだし」と満面の笑みで答えられた。意味分かんねー。

到着したヒサの家は私の家と同じようなマンションで、ついでに号室まで一緒だった。いくらドツペルゲンガーと言えどもそこまで一致するモノなのか。もしかして母親の顔まで一緒だったりして。

……一緒だった、マジで笑えねえ。

出来るだけ明るく無邪気な声と笑顔を心がけて言った「ただいまー！」は、けれど冷たい目で私を睨む母親には届かずに行き場を失くして掻き消えていった。違和感。果たしてこれが本当に優しい家族の反応だろうか？ お母さんの目を思い出す。男に「こいつ犯しているいわよ」と言った時のお母さんの目。あれと同じ。

頭に焼けるような痛みが走る。自分の身体が引きずられ始めて、ああ今のは髪の毛を掴まれたんだ、と気づいた。そのまま今まで引きずられて、まるで放り投げるかのように放り投げられた。頭を壁に強く打ち付けて呻く。

「え？」

滲む視界の端に見えた仏壇。嫌な予感がして、涙を拭う。仏壇にはユリと同じ顔をした誰かの写真と若い男の人の写真が置かれていた。嘘。嘘。あの記憶の中の父親の顔。いつものっぺらぼうのまま再生されていたあの顔。それが目の前にあった。

身体の痛みを無視して立ち上がり、ヒサの部屋らしき一室に駆け

込む。目に飛び込んできたその光景に、思わず笑ってしまった。一緒、私と一緒に。床に敷かれた絨毯は所々が赤黒く染まっていて、机の上には注射針と駆血帯が無造作に置かれている。あいつが言っていたことがすっかり嘘だったって、今さらに気づいた。うちの家族、優しいし。きっと楽しいよ。優しいし。楽しいよ。なんて。

私はヒサの瀉血道具を引っ掴んで家を飛び出した。

+++

17：潰楽エンターテイメント。

いつもなら喧騒に溢れている街は何故か静まり切っていて、人の気配と言うモノが微塵も感じられなかった。その静謐の中を走る、走る。あいつがいる場所は大体見当がついていた。あの公園でも無い、私の家でも無い。ヒサにとってそのどちらもが既にどうでもいい場所になっているだろうから。

裸足で飛び出して来たから足の裏に何か色々刺さって痛かったけれど、カラダの痛覚なんて意識しなければシャットダウン出来る。今まで私が耐えてきたココロの痛みに比べれば、にきびを潰した程度の痛みさ。

両足で交互に地面を蹴りながら、今までヒサがあのだけない声で言ってきたことを思い返した。例えば初めて喋ったあの時、彼女は自分が車に轢かれかけたことを「轢かれ損ねた」と言ったこと。それはきっと彼女なりの冗談だろうとか思っていたけれど、違ったんだ。

一緒に食べようと思って、とか言いながら私におにぎりを押し付けたあの時だって、ヒサの鞆の中に入っていたおにぎりは一つだけだった。あの時はそれどころじゃ無かったけれど、今落ち着いて考えてみればすぐに分かる。あいつも私と同じ。私はあいつと同じ。だって、ドッペルゲンガーだし。

丁度扉が開いて人が出てきたエレベーターに駆け込んで最上階のボタンを押した。人差し指に痛みが走る。突き指。でもそんなこともどうでもいいさ。どうでもいいんだって。私だってもう年頃の女子何だから指の一本や二本折れてるくらいが丁度いいって。意味分かんないけど。

『死ぬならねー、あつこのビルがいいなー。』

意味分かんないけどヒサはきつとあの時あ言った通りにこのビルから飛び降りて死ぬつもりに違いないんだ。

ぼーん、と言うのんきな音が響いて、エレベーターは最上階へ到達した。私は開きかけのドアに肩をぶち当てながら飛び出す。屋上に行く階段はどこ？ どこ？

「あつた」

普段なら進入を防ぐ為に閉じられているであろう扉は、けれど今は開け放されていた。屋上から冷たい風が吹き込んでくる。クソ、クソ。死んじまえ。死んだらぶつ殺すから。私は矛盾だらけの悪態を吐きながら、向こう側へと繋がる階段を駆け上った。

+++

18：愛胎リバーサイド。

浅くて激しい息を吸いながら吐きながら、屋上を見回す。そこには誰の姿も無かった。体中から力が抜けて行く。足がぐくぐくと震えて立っていられなくなった。失禁とかしちやいそうなくらいの脱力感と虚無感。

「どうして……」

なんて呟いてみるけれど、そんなの全部分かってる。

何故彼女が死を選んだのか。そんなの生きていられないほど辛かったからに決まってる。きつとあいつは私やユリなんかよりもよっ

ほど酷い目に合いながら生きてきた。だからあんなに歪んでしまったんだ。あんな歪んだ笑顔を浮かべるようになったんだ。恨む相手を失って死ぬのと恨み憎しみに包まれて死ぬの、どっちがマシなのかは知らないけれど、どちらにせよユリも、ヒサも、そしておそろくヒサの姉も、自ら死を選ぶしか無かったことは変わらない。

そして何故彼女が今ここにいないのか。そんなの、もうこっち側にいないからに決まってる。

「落ち着かなきゃ。」

深呼吸、深呼吸。けれどそれでも一向に気持ちは治まらない。ふと、ヒサの瀉血道具を持って出てきたことを思い出した。そうだ、瀉血。あれで心を落ち着けよう。

駆血帯で二の腕の辺りを縛って、腕の血管に針を刺す。焦っている所為か、何度も失敗して無い出血だらけになりながら6回目くらいでやっと血管を捉えた。針の先から血が溢れ出て来る。身体の中から温もりが逃げて行く感覚。

「あーあー、またやってる。って言うか死ぬ前にとって思ってたトイレ行ってる間に追いつかれるとは思って無かったよ。」

私は耳を疑った。幻聴でも聞いているんじゃないだろうか、なんて思った。どうして、と再び呟いた。振り向くと、そこには確かにヒサがいた。いつもつけている眼帯は外されていて、前髪の間から覗いている眼球は、目を逸らしたくなるくらいに潰れていた。

「その目……」

「ああ、これ？ 昔にお母さんに潰された。と言うか私の身体の傷、8割方はお母さんの所為だから。」

ヒサは、さも何でも無いことかのような軽い口調でそう言った。きっと彼女にとってはそれが普通なんだろう。私にとって自傷行為が当たり前であったように、ヒサにとっては母親に傷つけられることもまた当たり前。

「……生きていたら、いいことあるよ。」

「あのお母さんを見てまだそんなことが言えるの？」

「それでも、きっとあるから」

「いいことあるまで生きてなきゃいけないんだったら死んだ方がマシだってば。」

ヒサはおどけた調子でそう言っていていきなり走り出した。その先にあるのは、腰くらいの高さしか無いフェンス。そしてその向こうに広がるのは。ヤバイ。慌てて立ち上がって追いかける。コンクリートの地面を蹴って埃を撒き散らしながら、もう一人の私を救う為にでも救うって何だろう。ここで彼女を死から掬い出したところでどうせ家に帰ればそのうちヒサは殺されるに違いない。殴り殺される、蹴り殺される、刺し殺される、絞め殺される。それに比べたら、ここで潰れた方がよっぽど楽なんじゃ無いだろうか。墜落、潰楽。でも、もうそんなふう迷っている時間すら無いんだ。

フェンスに手を掛けてそのまま飛び越えようとするヒサ。飛びつくようにその腕を掴む私。

「……何で邪魔するのさ。」

間に、合った。私の手のひらの中にはしっかりと包帯だらけの腕が握られていて、ヒサはフェンスの向こう側で宙ぶらりんになって揺れていた。ついでに解けかけの包帯が風に吹かれてゆらゆらと揺れている。ゆらゆら、ゆらゆら。

「死ぬなよバカ」

「死ぬよバカ」

恐ろしく子供っぽいやり取りに、思わず私は笑った。ヒサも揺れながら笑っていた。あれか、人間死ぬ前は童心に戻りたくなるって奴とか？

「私がどんな人生を送ってきたか、何となくは分かったでしょ。あのお母さんを見れば。」

「分かったよ、サイテーな人生だって。お疲れ。そしてこれからもよろしく。」

「……私が死んじゃ駄目な理由って何？」

「あんたが死んだらわたし死ねーじゃんかバカ！」

超子供っぽく叫んでみた。今の私なら対象年齢三歳以上って言うラベルを貼っても違和感が無いくらいガキっぽいと思う。そこらの野郎にや真似出来無い幼さ。どうだ恐れ入ったか。けれどヒサは呆れたような顔で「それだけ？ 私が死んじゃダメな理由って。」と笑った。恐れ入ってくれよ、少しくらい。

ヒサの顔に、私の腕からどくどくと溢れ出る血液が滴っていた。ぼとぼと、ぼとぼと。

私は、サヤカさんに渡された便箋を見せようか、と少し悩んだ。

「ホントは自殺した時か娘に殺された時に渡してくれて頼まれてたんやけどね」と言いながら渡されたあの手紙。これを見ればヒサもを母を恨むのをやめてしまうかも知れない。けれど「こんなの嘘っぱちだ」と言って信じないかも知れないし、信じたところでそのまま自殺完遂、と言うのもありうるのだ。ユリのように。

私はやっぱりやめることにした。きっとこれはヒサが自分で気づいて、そのうえでどう生きて行くか決めるべきことだ。それにこの手紙は私の、私とユリだけの宝物だから、ヒサなんかに見せるわけにはいかないんだ。

私はヒサの潰れていない左目を見つめながら「多分これで全部。」と答えた。

「お前私を死なせない気、ある？」

「今はあんなしょーも無い理由しかねーけどな、あんたが死んじゃいけねー理由なんて後から後からポンポン出てくんだから、出てくるに決まってるんだから死ぬんじやねえよバカ！」

私は喉を壊すくらい大声で叫んだ。ヒサだけじゃ無い、私だってそう。死ぬんじやねーよ。いくらでも死にたくなるだろうけど、それでも死ぬんじやねーよ。ユリだって、ヒサの姉御だってそう！死んでどーすんだよ。お前らが死んだあとにはこんな辛さしか残ってねえんだよ。責任取れんのかこの野郎。

「キリに何が分かるのさ」

私とは正反対に落ち着いた声でヒサがそう呟いた。けれどその手は、しっかりと私とフェンスを握り締めていて。

「何にも分かんねーけどあんたが泣いたらその涙全部飲んでやるよ。」

私が不慣れな満面の笑顔でそう言っていると、諦めたように溜め息を吐いて、それから「笑えて無いって」と言う突っ込みを入れてながらヒサの身体はフェンスのこちら側へと戻ってきたのだった。

いつもの如く学校をさぼって、私はあの公園の滑り台で仰向けになつて寝ていた。勿論真つ昼間から星が見えるわけも無い。マジックマッシュルームの効能が切れた所為か、目を瞑ったところで瞼の裏に星が映つたりするようなことはもう無かった。そして、もうヒサの声が聞こえることも。

あの後、つまりヒサをフェンスから引き離して地面に叩きつけた後、私はとりあえずヒサを納得いくまで殴ってから「私はあんたであんたは私なんだから、何かあつたら頼りにこいよ」とかカッコイイ台詞を吐き捨てて逃げ出したわけけれども、その三日後に何だか寂しくなつて私はヒサの家を訪ねることにしたのだ、が。彼女に渡されていた地図の通りに歩いて到着したのは私の家だったのである。まごうこと無きマイホーム。いくらドッペルゲンガーだからってこれは舐めてるんじゃないのか。流石に自分の家かどうかくらいの区別はつくつての。

とにかくこうして私はヒサとの連絡手段を一切失ってしまった。今手元にある痕跡と言えば無理矢理につけさせられた包帯及び眼帯の残骸くらい。ヒサの世界と私の世界を繋ぐには少し頼りないものばかりだけれど、私が心の奥にしまっておくのにはぴったりの大きさだから。

ところで、サヤカさんに渡された手紙にはお母さんのあの可愛らしい筆跡でこう書かれてあった。

「死んでもずっと死ぬ程愛してる。私の大切な娘たちへ」

そのお母さんは、入院した二日後にあっけなく死んだ。何か腎臓がイカれてたとか肺に水が貯まってたとか脳から出血があつたとか色々重なった末に死んだ。誰ひとり見届ける者はいなかったそうだ。お母さんらしい、と言うか。きっとそれで良かったんだと思う。一人でひっそりと死んでゆくのが彼女にとっての一番の幸せだったんじゃないだろうかと思うから。

とにかくヒサは本当に小さなゴミを私の心に載せやがってそのまま消えた。お母さんは私の心を包む温かな毛布のようなモノを残して死んだ。だから私は、そのゴミをしつかりと持って毛布にくるまりながらこの人生を生き延びて行か無ければならないんじゃないだろうか。と怯えた。たまに死にたくなっても、私が死んだらヒサが死ねないから我慢しましょう。それに今頃きつとお母さんとお父さんとユリの三人でわいわいやっているところでしょうし、そこに私が乱入したら怒られるに違いないから我慢しましょう。我慢しましょう。我慢しましょう。

やってられるか！ と悪態を吐いたところでどうしようも無いわけ、私は死ぬまですっと死ぬ程生きて行かなきゃならないんだ。ファック。けどそんな人生も悪くは無い。悪くは無いぜ。

私は立ち上がって伸びをした。貧血でゆらゆらしながらもしっかりと睨みつけたその空は文句の一つもつけられないような見事な青空で、心配なんて何も無いのだった。

「16：哀状フィクション。」と「17：潰楽エンターテイメント。」と「18：

ダサいので本当はやりたくないのですが、サブタイトルの意味。

・哀状フィクション。

ヒサが語っていた愛情はフィクションで、本当は哀しい状況でした。

・潰楽エンターテイメント。

墜落して潰れたら楽になれるし結構エンターテインなイベントだよ。

・愛胎リバーサイド。

フェンスの上で相對している様子はまるで三途の川のほとりにいるみたい。そしてここから二人の間に友愛が胎児のように生まれてゆくのです。

と言うことでショーも無いこだわりを晒している内に瀉血デイズ、完結でございます。楽しんでいただけたでしょうか。

点数付けて頂けると泣いて喜びます。感想欄に感想頂けると泣いて喜びます。お気に入り登録なんぞして頂いた折にはもう嬉しすぎて統合失調症になってしまいかもしれません。是非是非よろしく願います。

あとこれからの立花凜もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150p/>

私とボクの瀉血デイズ。

2010年12月19日00時10分発行